



出版物紹介

1. 愛知大学東亜同文書院ブックレット①

安澤隆雄（東亜同文書院第25期生）『東亜同文書院とわが生涯の100年』

（愛知大学東亜同文書院大学記念センター編、(株)あるむ発行、2006年）

2006年7月22日、オープン・リサーチ・センター整備事業の一環として愛知大学で行われた安澤隆雄氏の講演会の内容が、愛知大学東亜同文書院ブックレットとして刊行されました。

内容は安澤氏の生い立ちに始まり、東亜同文書院入学の経緯や、入学後の学生生活の様子、学んだ学課、大旅行、そして東亜同文書院卒業から現在に至るまでの人生などについて記されています。特に、学生同士の結び付きが強められ、卒業後も大きな親近感をもって連絡しあうほどの緊密な人間関係が形成された寮生活の様子や、週末に学校から小遣いをもらって上海の街中に出掛けるといった休日の過ごし方、学んだ学課とその内容などに関する記述は、東亜同文書院で学び、生活した学生の姿を明らかにしています。と同時に、大旅行に関しては道中で体験したことが記されていますが、雲南から四川に抜ける当初の予定が、排日風潮の高揚によりミャンマーへのルート変更を余儀なくされたというような、緊迫した当時の状況も浮き彫りにされています。

安澤氏は東亜同文書院25期生の満100歳であり、大正末から昭和初期にかけて東亜同文書院で学ばれました。その当時の様子については、後世に生きる我々にとっては書籍や資料でしか知ることができなくなっています。しかし、『東亜同文書院とわが生涯の100年』は、安澤氏による生の証言が活字化されたものであり、いわば激動の20世紀を生きた安澤氏の、100年におよぶライフストーリーの記録です。本文は普通の語り口で記されており、また写真や図も多く取り入れられていますので、読みやすくなっています。したがって、東亜同文書院についての詳細な理解の一助となるだけでなく、近代日中関係史をより身近に感じることができる内容となっています。



2. 愛知大学東亜同文書院ブックレット 別冊

『愛知大学創成期の群像』

(愛知大学東亜同文書院大学記念センター編、(株)あるむ制作、2007年)

2006年、愛知大学は創立60周年を迎えました。それを記念して愛知大学東亜同文書院大学記念センターでは、「愛知大学創成期の群像 地域とともに60年」というテーマで、写真パネル展を愛知大学内で開催しました。『愛知大学創成期の群像』は、その時に展示した写真パネルをブックレットにまとめたものです。

東亜同文書院大学の終焉から愛知大学開学までの経緯を記したパネルをはじめ、愛知大学創成期を指導した林毅陸初代学長、本間喜一第二代・第四代学長、小岩井淨第三代学長を紹介したパネル、創成期の教授陣の顔写真、愛大事件（1952年）や薬師岳遭難事故（1963年）などの愛知大学を揺るがした大事件、愛知大学と地域との交流を示すパネル、さらには創成期当時の学生姿のスケッチなども収録されており、視覚を通して愛知大学の歴史と発展の様子が分かるようになっています。

また、愛知大学は旧陸軍施設を利用して、旧東亜同文書院大学教職員により1946年に設立された大学であるため、キャンパスには現在も旧軍時代の建物がいくつか残っており、その殆どが使用されています。『愛知大学創成期の群像』6、7頁には創成期当時と現在のキャンパス図が掲載されており、現存する建物が示されています。

愛知大学の歴史を理解するだけでなく、大学内に残る昔の建物を見学するガイドブックとしても活用できるものと思います。



3. 『同文書院記念報』VOL. 15

(愛知大学東亜同文書院大学記念センター編集・発行、2007年)

『同文書院記念報』は、愛知大学東亜同文書院大学記念センターが1994年以降毎年発行している冊子で、今年で15巻目を数えます。

主に東亜同文書院に関する資料の紹介や、東亜同文書院に関する論文、講演会やシンポジウムの記録などが掲載されていますが、今回は公開研究会の記録をはじめとして、東亜同文書院をめぐる上海交通大学との共同研究の成果についての報告や資料紹介など、内容も多岐にわたっています。

「我が父本間喜一と愛知大学・東亜同文書院大学を語る——ゼロからの出発 愛大創成期の秘話——」は、オープン・リサーチ・センター整備事業の一環として、2006年12月7日に本間喜一愛知大学名誉学長の長女・殿岡晟子（あきこ）さんをお招きして、愛知大学で開催された公開研究会の記録です。日本の敗戦と東亜同文書院大学の閉校、引き揚げ後の愛知大学の設立、そして愛知大学創立後に発生した愛大事件（1952年）、薬師岳遭難事故（1963年）における本間氏の果たし

た役割などについて語られました。学生を愛するとともに、大学運営に心血を注いでいた本間氏の姿が明らかにされています。

「東亜同文書院をめぐる上海交通大学との共同研究と「史実共同研究発表会」について」は、3年に及ぶ霞山会と上海交通大学との共同研究において日本側代表を務めた、愛知大学東亜同文書院大学記念センター／オープン・リサーチ・センター長の藤田佳久教授の活動報告です。近年の中国側の東亜同文書院に対する認識、東亜同文書院研究の状況などについて述べられており、中国において従来のようなイデオロギー的見解ではなく、史実を重視する研究が登場してきている現状が紹介されています。

「交通大学・霞山会史実共同研究事業の成果『資料選集』を読んで」は、東亜同文書院41期生の高瀬恒一氏が、霞山会と上海交通大学の共同研究の成果として2006年にまとめられた『資料選集』について、同書所収の資料の価値の高さに言及されたものです。

「記念センター所蔵根津家資料目録（付、寄贈資料目録①）」は、ポスト・ドクターの武井義和が2006年度に行った、愛知大学東亜同文書院大学記念センターが所蔵する資料の整理の成果を、目録として発表したものです。資料目録の公開は今後も『同文書院記念報』誌上で継続する予定となっています。

「平成18年度東亜同文書院記念基金会記念賞・奨励賞の推薦文」は、記念賞を受賞したテレビ宮崎への高瀬恒一氏（書院41期生）の推薦文、奨励賞を受賞した成瀬さよ子氏への小崎昌業氏（書院42期生）の推薦文が掲載されています。

テレビ宮崎は、2006年に「新民先生——ふりかえりみて悔いなき時なり——」という題名の番組を制作し放映したことが評価されました。この番組は全国放映ではなかったですが、東亜同文書院出身の新名言志氏が戦争中、宮崎県の炭鉱に連行されていた中国人労働者を親身になってかばい、待遇改善に尽力したことを明らかにしています。

成瀬さよ子氏は、愛知大学図書館に司書として勤務する傍ら、長い時間をかけて『東亜同文書院関係目録』を作成したことが評価されました。この目録は明治時代から2000年代までの100余年の間に世に出された、東亜同文会・東亜同文書院関係の図書、研究論文類などを幅広く網羅したもので、今後の東亜同文会・東亜同文書院研究に大きく役立つものと思われます。

（文責 武井義和）

